



～伊勢や日向～

株式会社百五銀行
代表取締役頭取 伊藤 歳恭

三重県を代表する「伊勢」の諺や成句を紹介します。

まず、伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ、という諺から。津に港があるおかげで伊勢は参拝客が多く、同時に、伊勢への参拝客が多いから津の港が栄える、伊勢と津は持ちつ持たれつの関係だというものです。このあと、尾張名古屋は城で持つ、と続きますが、名古屋の街と名古屋城は切っても切れない関係(＝持ちつ持たれつ)という意味でしょう。

伊勢へ七度熊野へ三度、というのもあります。伊勢神宮や熊野三山へ度々参詣するべし、信心はどれだけ厚くても厚すぎるということはないという教えです。このあと、愛宕さまへは月参り、と続きます。江戸時代の「東海道中膝栗毛」に出てくる句です。

少し毛色の変った成句に、伊勢や日向、というのがあります。順序が乱れてちぐはぐなことを指しますが、これは説明が要ります。

あるとき、九州の日向と伊勢の国で、二人の男性が同時刻に亡くなり、あの世で同時に閻魔様の前に出ることになりましたが、日向の男は寿命が尽きていたのに対し、伊勢の男はまだ寿命が残っていたので、閻魔様は伊勢の男をこの世に返すことにしました。ところが、返そうとした伊勢の男の屍がすでに焼却されてしまっていたので、仕方なく日向の男の体を使って伊勢の男を生き返らせたのです。当然、生き返った伊勢の男の傍には日向の妻がいる訳ですから、伊勢の男は自分の妻ではないと言い、日向の女は自分の夫が生き返ったことを喜ぶという、ちぐはぐで辻褄の合わない話です。ちぐはぐな話が多い「伊勢物語」のタイトルは、業平が「伊勢や日向」から採ったという一説も。

実は、十年ほど前までこの言葉を知りませんでした。知ってからは、やっつけ仕事はだめだぞ、とか、最初に辻褄が合わないことはどこまで行っても辻褄が合わないから、いずれ困ることになって、下手をすると何かで糊塗する羽目に陥ってしまうので、出来るだけ早めに、これは伊勢や日向だと気づいた時点でゼロクリアする、絡みついたしがらみがたくさんあっても原点に戻す、と手帳に朱記して気をつけております。

地元の教え3題。大事にしていきたいと思います。